

特別助成 東日本大震災の被災者を元気づける事業

「福島の子どもたちが元気になる移動教室 in上田」事業

福島の子どもたちが継続的に自然のなかでリフレッシュできる支援の仕組みづくりを推進

被災した福島の母子を支援する「NPO法人こどもプロジェクト」では、長野県上田市や地域の団体と連携し、原発事故によりストレスを抱えた福島の子どもたちが上田の自然のなかでのびのびとリフレッシュできる宿泊プロジェクトを進めている。今後定期的に滞在できるように、行政と民間で協働する支援の仕組みづくりを目指す。



夏の楽しみは豊かな自然のなかでの川遊び



冬は雪の信州上田でスキーやソリ遊びを体験

福島県内に住む母子も避難している母子もリフレッシュの機会が必要

「NPO法人こどもプロジェクト」が2014年から始めた上田市でのリフレッシュ事業が3年目を迎えた。夏、冬、春休みを利用して自然とふれあう2泊3日のプログラムに、福島県内に住む子どもや東京に避難している子どもが家族と参加できる。これまでのべ300人近くの母子が参加してきた。2016年度は前年に引き続きAJOSCの助成を受け、夏（8月16～18日、26～28日）、冬（1月6～8日）の3回実施し、90人近い福島の母子が参加した。募集定員は毎回すぐに埋まり、抽選になることもある。半数はリピーターだが、保養の機会が減っている最近は新規の参加者も増えており、震災から6年経つ今もニーズは高いという。

「福島から避難しなかったことを今も悩んでいる人、母子避難して先の不安を深めている人など立場は様々ですが、子どもの健康に不安を感じているのは皆同じです。子どもをリフレッシュさせることはもとより、お母さんたちにとってもお互いに情報交換をしたり、本音を言い合ったりしてリフレッシュする場になっていると思います」。同法人の理事長、福田恵美さんはそう話す。

チェルノブイリでは、子どもたちを一定期間放射線量の低いところで過ごさせる保養の制度が現在も継続されているというが、福島においては、人口流出や風評被害を防ぐなどの理由から保護という制度の整備が進んでいないのが現状だ。放射能に対する不安はあっても現地ではなかなか口に出せず、悩みを抱えてしまう母親は多いという。

自然とふれあう多様なプログラムを継続的に実施する拠点づくりに注力

「ふくしまっ子夏（冬）の教室in上田」では、原発事故以来外でのびのびと遊ぶ機会が減ってしまった子どもたちが、思いっきり自然とふれあい、自然のなかで学び、地域の子どもたちと交流して楽しむための様々なプログラムが用意されている。「夏の学校」では、川遊びや魚のつかみ取り、バーベキューのほか、レアアースが日本周辺の海底にあることを発見した地質学者として知られる東京大学の加藤先生の科学教室が人気で、今回は蛍光石探しをして地球について学んだ。「冬の学校」では、大自然のなかでのスキー体験をはじめ、子どもたちに人気のプログラムである忍者修行、餅つき大会などで地域の人たちと交流した。「保養ということにこだわらず、上田に来たらこんな楽しいことがあると思ってもらえるようなプログラムを開発

していきたい」と福田さんは言う。

本事業も3年目ということで、福島県や上田市のNPOとの連携、上田市での受け入れ体勢も整備されてきているという。次に福田さんが本格的に取り組もうとしているのがリフレッシュの拠点づくりだ。現在は地元の宿泊施設を借りて実施しているが、長期的に支援を続けていくためにも専用の施設をつくり、「国、自治体、企業、市民が協働で支える仕組みづくり」が必要と説く。

「国や自治体に土地を提供してもらって拠点となる施設をつくり、利用者の自治体が宿泊費を払い、NPOやボランティアが運営するという仕組みができればいいと考えています。上田での取り組みをモデル事業として、ゆくゆくは全国で受け皿を増やしていきたい」という福田さん。思い描くビジョンに向け、本事業は新たな局面を迎えようとしている。



子どもたちに大人気のプログラム、忍者修行



「ふくしまっ子夏の学校in上田」への参加を募集するチラシ

助成団体: 特定非営利活動法人 こどもプロジェクト

<http://kodomo-project.com>



福島の母子を支援する仕組みづくりを継続していきたい

震災から6年たった今も、まだまだ不安や人に言えない悩みを抱えている被災者は多いということを知らされ、この事業の必要性をますます実感したところです。本年度の成果と課題をもとに、長期的な支援の仕組み作りを続けていきたいと思っています。今後ご支援をいただけたらうれしいです。本当にありがとうございました。

NPO法人 こどもプロジェクト
理事長 福田恵美さん